事に據つて、直に回鶻人には當時佛教を信ずるものが少しも無かつたといふ如き見方をするものではない。かゝる問題については、多數の中には或は之を信ずるものもあつたらうと想像すべき餘地は充分に認めるが、それにしても、概して言はゞ彼等は摩尼教徒にして佛教徒で無かつたことに毛頭疑ひないと思ふ。茲に於てか疑問は自から所謂回鶻文の佛典と稱せらるゝものに向けられねばならぬ。

回鶻人の佛教に歸依した形跡が少くとも唐代の末、第十世紀以前に存しないとすれば、新疆や敦煌から出た多くの所謂回鶻文佛典なるものは、自然の結果として唐代を終つて以後のものと見なければなるまい。併しながらかゝる見解は一般に學者が此の佛典に對して認めて居る所と相容れない。勿論此等の佛典中、敦煌の佛洞から出たものゝ一部分、または新疆から出たものにも、沙中より發掘せられたので無くて、特別の狀態の下に保存せられたもの、例へば露西亞のマロフ氏が發見した金光明經の如き、遙に後世の書寫に成るものは論外で問題にはならぬが、龜茲吐魯番の近傍諸地の沙中より、他の唐代の年次を有する、またはその時代のものなること疑無き漢文書を始め、其の他の言語を用ひた文書や遺物と共に現はれて來る回鶻文佛典については、何人も之を唐代のもの、七世紀八世紀のものなるを認めて疑ふものはない。精密に年月を附した回鶻文佛典と稱せらるゝものゝ出ないことは遺憾ではあるが、常識から考へて見ても、二百年も三百年も時代の異つた文記が、一ッや二ッの例ならば兎も角も、隨處に同時に同樣の狀態に於て見出され得べき筈は無く、考古學者の所謂共存（co-existence）の關係上、此等の文書に七・八世紀頃からの年月を認めるのは至當の事である。しかし之が至當の事である丈け一方には反對に回鶻文佛典を七・